

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12917

研究課題名（和文）近世中期の芭蕉発句注釈に見る蕉風俳諧受容に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Reception of Basho-style Haiku in Basho's Haiku Commentary in the Mid-Early Modern Period

研究代表者

服部 温子 (Hattori, Atsuko)

奈良女子大学・大学院人間文化総合科学研究科・博士研究員

研究者番号：60790194

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、蓼太が著した芭蕉発句の注釈書『芭蕉句解』（宝暦9年刊）と、その『芭蕉句解』を増補・訂正するかたちで蓼太の弟子である荘丹が著した注釈書『芭蕉句解参考』（文化4年刊）の分析を通して、近世期における蕉風俳諧受容の一端を明らかにすることにある。生前には一俳諧師でしかなかった芭蕉だが、時代を経るほどに地位を高め、蕉風復興が叫ばれた近世中期には絶対的な存在として仰がれるまでに至る。多くの俳諧師がいたなかで、なぜ芭蕉と蕉風俳諧だけが飛び抜けて高い評価を得たのか。近世中期の俳人たちが模範とした芭蕉と蕉風俳諧とは何なのか。本研究では、それを古注釈の分析を通して明らかにすることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

蓼太・荘丹の生きた近世中期は、蕉風復興期として近年注目されている時代である。本研究で蓼太・荘丹の芭蕉観を明らかにできれば、これら近世中期の俳諧および俳壇の研究をさらに推し進める一助となると考えられる。

また、古注釈を対象とした研究は、和歌・連歌では積極的に行われているが、俳諧では、これまでほとんど研究に活かされてこなかった。しかし、古注釈は当時の人々がその作家や作品をどう捉えているかを知るには有効な資料となるはずであり、古注釈を研究すればこれまでの現代の視点からの芭蕉研究・蕉風俳諧研究では指摘されてこなかった新しい芭蕉および蕉風俳諧の特徴が見えてくる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to analyze the commentaries on Basho's haiku, "Basho Kukai" (1759) and "Basho Kukai Sanko" (1807) and clarify how Basho's haiku was received in the early modern period. to do. "Basho Kukai" was written by Ryota, a haiku poet who gained tremendous support mainly in the Kanto region in the middle of the early modern period. In addition, Ryota's disciple Sotan wrote "Basho Kukai Sanko" by adding and correcting "Basho Kukai". Basho, who was not a special existence during his lifetime, came to be appreciated over time, and in the middle of the early modern period, he was looked up to as an absolute existence. Among many haikai poets, why were only Basho and Basho-style haikai so highly rated? What are Basho and Basho-style haikai that were modeled by haiku poets in the mid-early modern period? In this research, I aimed to clarify it through the analysis of old annotations.

研究分野：日本文学

キーワード：芭蕉 蕉風俳諧 蓼太 荘丹

1. 研究開始当初の背景

本研究は、蓼太の手になる芭蕉発句の注釈書『芭蕉句解』(宝暦9年=1759)と、それを増補・訂正した、莊丹の手になる注釈書『芭蕉句解参考』(文化4年=1807)の分析を通して、近世中期における蕉風俳諧受容の一端を明らかにすることにある。今でこそ「俳聖」と呼ばれる芭蕉だが、元禄俳壇においては一俳諧師でしかなかった。芭蕉と同時代、上方では来山が、江戸では調和が大きな支持を集めており、芭蕉とその門人は決して主流派ではなかった。それにもかかわらず、享保末年(1735)頃から「俳諧七部集」をはじめとする蕉風俳書の再出版が盛んに行われるようになり、新たに発句集や連句集、俳論集も編まれるなど、芭蕉と蕉風俳諧への評価は急速に高まっていった。なぜこの時期に芭蕉と蕉風俳諧への評価が高まったのか。近世中期の俳人たちは芭蕉および蕉風俳諧をどう捉えていたのか。本研究は、それを古注釈の分析によって明らかにしようと試みたものである。

蓼太は、芭蕉の高弟である嵐雪を祖とする「雪中庵」の三世を継いだ人物である。芭蕉顕彰事業にも積極的で、多くの芭蕉資料を発掘・紹介し、注釈書も手がけた。蓼太は、俳壇経営にも長けており、その当時関東を中心に絶大な支持を集めた俳諧宗匠であった。それゆえ蓼太が著した『芭蕉句解』は、近世期に刊行された芭蕉発句の注釈書のなかで最も広く流布した注釈書であり、後に作られた注釈書に与えた影響も大きい。よって、近世中期以降の芭蕉受容の実態を明らかにする第一歩として、まずは『芭蕉句解』を通して蓼太の芭蕉観・蕉風俳諧観を明らかにしておきたいと考えている。

莊丹は、蓼太の弟子で、蓼太の注釈事業を受け継いだ人物である。『芭蕉句解参考』に先だって、寛政8年(1796)には嵐雪と同じく芭蕉の高弟として知られる其角発句の注釈書『晋子発句撮解』を、文化3年(1806)には嵐雪発句の注釈書『嵐雪発句撮解』を著している。その後、蓼太の『芭蕉句解』を増補・訂正するかたちで著されたのが『芭蕉句解参考』である。『芭蕉句解参考』では、蓼太説と自説を併記し掲出している。そのため両者の説を比較しやすくなっている点が特徴的である。また『芭蕉句解参考』は、後に『晋子発句撮解』『嵐雪発句撮解』と併せて『三家発句解』(文化8年=1811)としても販売されており、本書も広く流布し俳壇に与えた影響が大きい注釈書と言える。さらに、芭蕉だけでなく、先に著された『晋子発句撮解』『嵐雪発句撮解』も俳壇に与えた影響が大きく、将来的には二書についても考察したいと考えているので、その前段階としても莊丹の芭蕉観は明らかにしておきたい。そのため、もう一つの研究対象として『芭蕉句解参考』を選んだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近世中期に関東を中心に絶大な支持を集めた俳諧宗匠である蓼太が著した芭蕉発句の注釈書『芭蕉句解』(宝暦9年=1759)と、その『芭蕉句解』を増補・訂正するかたちで蓼太の弟子である莊丹が著した注釈書『芭蕉句解参考』(文化4年=1807)の分析を通して、近世期における蕉風俳諧受容の一端を明らかにすることにある。

蓼太・莊丹の生きた近世中期は、田中道雄『蕉風復興運動と蕪村』(岩波書店、2000年)などの研究書の出版、田中道雄・田坂英俊・中森康之編『蝶夢全集』(和泉書院、2013年)などの全集の出版、「芭蕉に帰れ 蕪村と暁台 京・尾張からの蕉風復興」(柿衛文庫、2004年)、「俳諧中興時代 芭蕉に帰れ」(芭蕉翁記念館、2014年)といった博物館展示の開催があり、近年注目されている時代である。本研究で蓼太・莊丹の芭蕉観・蕉風俳諧観を明らかにできれば、これら近世中期の俳諧および俳壇の研究をさらに推し進める一助となると考えられる。

また、古注釈を対象とした研究は、和歌・連歌では積極的に行われているが、俳諧では、岩田九郎編『諸注評釈芭蕉俳句大成』(明治書院、1967年)などの集成本は出版されているものの、これまでほとんど研究に活かされてこなかった。古注釈の多くが典拠の指摘にとどまっており、解釈の助けになるものが少なかったためであろう。しかし、古注釈は、今日的には取るに足りない注釈であっても、当時の人々がその作家や作品をどう捉えているかを知るには有効な資料となるはずである。

こうした考えのもと、本研究では古注釈の分析を試みた。

3. 研究の方法

本研究では、『芭蕉句解』『芭蕉句解参考』の本文異同、蓼太の芭蕉評価の実態、莊丹の芭蕉評価の実態を明らかにすることを試みた。

『芭蕉句解』『芭蕉句解参考』の本文異同を確認する

『芭蕉句解』は、宝暦9年(1759)に江戸の須原屋太兵衛・京の井筒屋庄兵衛から出版され、その後も版元を変えながら再印出版され続け、天保年間には収録句を追加した再版本が出版されていることがわかっている。しかし、これらの詳細な本文異同は確認されていない。また、『芭

『芭蕉句解参考』は、文化4年(1807)に江戸の西村源六から出版され、その4年後に『晋子発句撮解』『嵐雪発句撮解』と併せて『三家発句解』としても再印出版されているが、単独版と『三家発句解』版の間での本文異同は確認されていない。そこで、まずは『芭蕉句解』『芭蕉句解参考』の諸本を調査し、本文異同箇所を確認する。『芭蕉句解』『芭蕉句解参考』ともに伝本は多いが、本文校異作業ができればよいので、直接調査すべき本は限られている。天理大学附属天理図書館等、近隣の図書館をまわり本文調査を行う。

蓼太の芭蕉評価の実態を明らかにする

『芭蕉句解』は、宝暦版では83句、天保版では76句追加し159句の芭蕉発句に注釈を施している(『俳文学大辞典』、角川書店、1995年)。『芭蕉句解』以前に一般に知られていた芭蕉発句は、元禄11年(1698)に出版された『泊船集』(風国編)に収載されるもので574句、元文4年(1739)に出版された『芭蕉句選』(華雀編)に収載されるもので671句なので、『芭蕉句解』はかなり厳選していることになる。芭蕉は作風変化の激しい作家として知られているが、蓼太が選んだ芭蕉発句を分析することで、蓼太が評価した芭蕉がいつの時代の芭蕉なのか明らかになる。そこから蓼太の芭蕉観・蕉風俳諧観も見えてくるものと考えられる。また、注釈の内容も分析することで、蓼太の芭蕉評価の実態を明らかにできるはずである。さらに、蓼太は天明7年(1787)没のため、天保版で追加されたとされる76句分の注釈については蓼太自身によるものかどうか考える必要がある。その問題についても併せて答えを出したい。蓼太には『俳諧七部集』に注釈を施した『ばせを翁七部搜』等の著作もあるので、それらの説と比較すれば、追加分の出所を明らかにできるはずである。

莊丹の芭蕉評価の実態を明らかにする

『芭蕉句解参考』は、95句の芭蕉発句と芭蕉俳文「幻住庵記」に注釈を施している。その際、自説だけでなく蓼太説も併記するかたちで掲出している。『芭蕉句解参考』において『芭蕉句解』と異なる見解を示している発句、および『芭蕉句解』に未収録で『芭蕉句解参考』が新たにとりあげた発句を中心に分析すれば、莊丹の芭蕉評価の実態を明らかにできるものと考えている。『芭蕉句解』から『芭蕉句解参考』に至るまでには、10点の芭蕉発句の注釈書が出版されており、それらから影響を受けた可能性も考える必要がある。これについては岩田九郎編『諸注評釈芭蕉俳句大成』(明治書院、1967年)等の先行研究を参考にし、必要があれば天理大学附属天理図書館・国文学研究資料館等が所蔵するマイクロフィルムで原文を確認しながら進めていく。

以上のように、『芭蕉句解』『芭蕉句解参考』の内容を分析することで、蓼太と莊丹がそれぞれ芭蕉および芭蕉発句をどのように評価していたのか明らかにしたい。

4. 研究成果

『芭蕉句解』『芭蕉句解参考』の本文異同について

『芭蕉句解』の宝暦9年(1759)版と天保14年(1843)版で本文校異を行った。宝暦9年版『芭蕉句解』は、83句についての注釈と、「付録」として46句についての作者・句形への考察という計129句を収めている。管見の限り付録部分を欠く本は存在せず、初版からこのかたちであったと考えられる。天保14年版は、この129句に新たに76句の本文のみを追加し、計205句を収めている。新型コロナウイルス感染症流行のため、原本調査がかなわず、複写を用いた比較となったため、一部に判読できない箇所があったものの、重複部分の本文については概ね異同はないことを明らかにできた。

本文校異作業に加え、『芭蕉句解』が採用する句形が、先行のどの俳書によっているか確認する作業も行った。大部分が当時すでに出版されていた芭蕉発句集である『泊船集』(元禄11年=1698)や『芭蕉句選』(元文4年=1739)によっているが、一部に写本でしか伝わらない句形や、現存の俳書には見えない句形も収録していることが明らかになった。これら典拠不明の句形や情報については、今後引き続き、蓼太の他の著作にもあたり考察していくつもりである。

一方、天保14年版は、蓼太の死後出版されたものであるため、ここで追加された76句は二人以外の誰かの手によるが、その選定者までは明らかにできなかった。天保14年にはすでに多くの類似する芭蕉発句集・注釈書が出版されていたが、『芭蕉句解』はそれらと比較すると収録句数が少ないため、その欠点を補うための書肆などによる追加であろうが、テキストに誤りが多く、蓼太が手がけた部分とくらべると杜撰なものとなっている。

なお、『芭蕉句解』は、日本古典籍総合目録によれば、ほかに天保8年(1837)版もあるとされるが、この版については期間中の調査がかなわなかったため、今後の課題としたい。

蓼太の芭蕉評価の実態について

『芭蕉句解』は、芭蕉発句83句に注釈を施している。83句の内訳を記すと、寛文期(1661~1673)のものが0句、延宝期(1674~1681)のものが4句、天和期(1682~1684)のものが14句、貞享期(1685~1688)のものが24句、元禄期(1689~1694)のものが40句、年次不詳のものが1句となっている。現存する芭蕉発句は、約50パーセントが元禄期、約25パーセントが貞

享期のものであり、天和期のものは7パーセントしかない。それをふまえると、『芭蕉句解』の採用句は、天和期のものが多いことを指摘できる。

その期を代表する蕉門俳書『虚栗』(天和3年=1683)から「虚栗調」などと呼ばれる漢詩文調を多用した破調の句が流行した時期で、今日的には過渡期としてあまり評価されていないが、近世期には麦水や蕪村なども天和期の作風を高く評価している。蓼太の評価も同様の傾向を示しており、近世期の芭蕉受容を考えるうえで、天和期を注視すべき時代であることがわかった。

ただし、本研究期間中には注釈部分の深い内容までは分析が至らなかった。よって、今後さらに考察を続け、蓼太の他の著作や同じく天和期の作風を支持する麦水や蕪村の証言などもふまえ、近世期における天和期の蕉風俳諧の評価の実態を明らかにしていきたいと考えている。

莊丹の芭蕉評価の実態について

『芭蕉句解参考』が注を施している発句は95句(うち1句は現代では同句の異形とされるため、実質は94句)である。そのうち31句が蓼太の『芭蕉句解』の注釈を増補・訂正したもの、残りの64句(実質63句)が新たに注を施したものになる。新たに加えたものは『芭蕉句解』で不足している元禄期の句が中心となる。解釈を増補・訂正したものについては、その多くが新たな典拠や考察のための資料を提供しているもので、蓼太の注釈を否定するものはあまりない。ただし、一部には蓼太の解釈を退け、独自の解釈を展開している句も見え、師である蓼太の説を無批判に受け入れているのではないことがわかる。また、全体の2/3にあたる、新たな解釈を施したものについても、安永3年(1774)に蝶夢が出版した『芭蕉翁発句集』(『芭蕉句解参考』中では「蝶夢集」と呼ばれる)や同4年(1775)に暁台が出版した『去来抄』など、『芭蕉句解』以降に公刊された関係書籍を積極的に取り入れつつ独自の解釈を施していることを明らかにできた。

『芭蕉句解参考』が刊行された文化3年(1806)には、すでに多くの芭蕉および蕉風俳諧作品の注釈書が刊行されている。令和4年度の考察では、それら同時代の解釈と比較し莊丹の注釈を位置づけるところまでには至らなかったため、今後さらに考察を続けていくつもりである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------